

信州大学学生による地域貢献活動とその評価 —14年間にわたる「信大 YOU 遊世間」の事例研究—

土井 進

【要旨】

本研究の目的は、まず第1に14年間にわたって継続されている「信大 YOU 遊世間（ワールド）」という学生組織の目的と変遷を明らかにすることである。「信大 YOU 遊世間」は、1994年に開始された「信大 YOU 遊サタデー」を前身とし、次いで「信大 YOU 遊広場（プラザ）」と改称し、5年前から「信大 YOU 遊世間」として定着してきている。第2の課題は、地域社会との連携体制をどのように図っているかを明らかにすることである。そして、第3の課題は、地域社会での活動による学生の学びと地域社会の人々からの評価を、次の4つの事例を通して明らかにすることである。即ち、長野市茂菅地区で実施されている「信大茂菅ふるさと農場」、青木村で実施されている「青木村えがおクラブ」、麻績村で実施されている「麻績村 de 遊ぼう」、そして、須坂市で実施されている「信州すずか農業小学校」である。この4つの事例研究を通して、「信大 YOU 遊世間」の活動が学生たちに、大学キャンパスの中だけでは決して得られない多くの学びをもたらしていることが明らかになった。また、この活動に対して地域社会からも高い評価が寄せられていることを提示した。

キーワード 信大 YOU 遊世間、地域貢献、信大茂菅ふるさと農場

1. はじめに 本稿の目的

「信大 YOU 遊サタデー」は、文部科学省の提唱によって1997年度（平成9年度）から国立大学が法人化された2004年度（平成16年度）まで、全国の教員養成系大学・学部で実施されたフレンドシップ事業の先駆けとなり、モデルとなった。本学部においては、法人化を見据

えて2003年度（平成15年度）に「信大 YOU 遊世間（ワールド）」と改称して、新たな学生組織のもとで活動が継続され14年目を迎えている。学生が地域社会に出て、地域の団体と連携して青少年の育成に取り組むこの実践は、信州におけるブランドの一つと言えるのではなからうか。

本稿の課題は、まず第一に14年間にわたって継続されている「信大 YOU 遊世間」の組織と目的の変遷を明らかにすること。第二に地域社会との連携体制がどのように図られているのかを明らかにすること。そして、第三に地域社会の人々から寄せられている学生の活動に対する評価を4つの事例を取り上げて明らかにすることである。

2. 「信大 YOU 遊サタデー」（平成6年度～平成12年度）発足の意義

1994年度（平成6年度）に「信大 YOU 遊サタデー」と命名された、学生が主体となった地域貢献活動が始まった。これは教育実習だけでは実践的指導力の修得が不十分であり、もっと子どもたちとふれあう中で自らの力量を向上させたいと考えた36名の学生によって自主的に始められたものであった。

平成6年6月6日に組織が立ち上がり、組織の名称をどうするかについての検討会が行われ、教師という立場に立つのではなく、子どもたち（YOU）のお兄さん・お姉さんとなって、思いっきり遊びたいという願いから「信大 YOU 遊サタデー」と名付けられたのであった。そして、第1回目の活動が1994年9月10日（土）に教育学部キャンパスで開かれ、次の9つの講座が開設された。スライム、小麦粉粘土、木工教室、お弁当箱の袋、自転車大分解、ビデオカメラ、英会話、音楽作り、けん玉。これらの講座に57名の子どもが参加し、26名の学生スタッフが誠心誠意子どもたちと接し、子どもにとっても学生にとっ

でも心の底から楽しめる活動となった。

この様子がNHKの朝の全国ニュースで紹介されたことが大きな要因となって、第2回からは100名～300名の子どもとその保護者が教育学部キャンパスに参加するようになった。こうして「信大YOU遊サタデー」は2000年度（平成12年度）まで7年間継続することによって、地域の青少年の育成や教員養成カリキュラムの改革に大きく貢献することになった。それらを総括すると次の4点にまとめることができよう。

- ① 大学キャンパスでの開催21回、地域に出向いての開催13回、合計34回のYOU遊サタデーに延べ約1800名の学生が主体的に参加し、約4300名の子どもたちとふれあい、地域の青少年育成に貢献することができた。
- ② 学生が自主的・主体的にYOU遊サタデーに参加し、仲間と共に学びの場を創造する労作業に取り組むことによって、教師の道への自覚と決意を深めると共に、企画力、教材開発力、子ども理解力、コミュニケーション能力等の実践的指導力の基礎を修得することができた。
- ③ この事業を通して体験的カリキュラムへの学生のニーズが強いことが検証されたので信州大学教育学部では平成8年度に1年次に「教育参加」、平成11年度に2年次に「学校教育臨床演習」を新設すると共に、平成10年度から教育実習を3年次と4年次に分割し、それぞれ「基礎教育実習」「応用教育実習」とした。さらに平成14年度に1年次に「学校教育臨床基礎」を増設することによって臨床経験科目の体系化が実現した。

その後、平成17・18年度の教員養成GPによる研究成果を取り入れて、1年次に「教育臨床入門」「教育臨床基礎」、2年次に「教育臨床演習」、3年次に「教育実習事前事後指導」「基礎

教育実習」、4年次に「応用教育実習」を配置し、臨床経験科目の一層の体系化が図られた。

- ④「信大 YOU 遊サタデー」は、文部科学省によって平成9年度～平成15年度まで全国の教員養成系大学・学部で実施されたフレンドシップ事業の先駆けとなるとともに、全国の学生が交流する全国フレンドシップ活動の基礎作りにも貢献した。

3. 「信大 YOU 遊サタデー」から「信大 YOU 遊広場（プラザ）」（平成13年度～14年度）、「信大 YOU 遊世間（ワールド）」（平成15年度～現在）への転換

「信大 YOU 遊サタデー」は上述のように確かに大きな効果をもたらしたが、それに伴う問題点も明らかになってきた。まず第一に、100名～300名の子どもが参加する大きなイベントを1年に3回も実施することは容易なことではなく、学生実行委員の加重負担が問題となり、実行委員長を担って立とうとする学生が現れなくなってきた。第二は「信大 YOU 遊サタデー」は学生の主体的な取り組みであり、学生側の意思によって授業科目としては位置付けられていなかったため、万が一の事故に対する学部側の責任体制が明確ではなかった。第三の問題点は、教員採用試験の厳しさが増してくる中で4年生が実行委員をつとめる体制を見直す必要が生じてきた。そして、第四の問題点は、「信大 YOU 遊サタデー」の取り組みは学生にとっても参加した子どもたちにとっても意義深いものであったがゆえに、1日限りのイベントとして終わってしまうのはもったいない、相互の人間関係を継続的に深めていくことのできる方向へと、「信大 YOU 遊サタデー」の学生組織を見直そうとする動きが強まってきた。

こうして学生たちの願いを実現し、これまでの問題点を克服する体制として、次のような改革が試みられた。まず第一に、地域社会と連

携した継続的な活動を願って名称を「信大YOU遊広場（プラザ）」と改称した。第二に、この「信大YOU遊広場（プラザ）」を取り込む「社会体験実習」という授業科目を立ち上げた。これによって授業の担当教員が決まり、教員養成カリキュラムとして位置付けられることになった。第三に、これまでの1日だけの「信大YOU遊サタデー」を数名の実行委員が指揮する体制ではなく、1年間にわたって継続的に体験活動を実施する組織を広場（プラザ）として立ち上げることにした。このことによってそれぞれのプラザ長が各プラザの責任を担うことになり、「信大YOU遊広場」の全体を指揮する実行委員長の負担が軽減されることになった。これによって各プラザ長が責任をもって力量を発揮する機会となり、幅広いリーダー養成が行われることになった。第四に、プラザ長は3年生が担当することになったので、先輩から後輩へと様々な技能や経験が伝えられ、後輩の成長を助けることにもなった。こうして平成13年度には「信大茂菅ふるさと農場」「信大牟礼ふるさと農場」「キャンパス・プレーパーク」「信大YOU遊・興譲館」など8つのプラザが開設され心機一転が図られた。

このような脱皮を図ったことによって、参加する学生がサタデーのころの100名規模から170名規模にまで拡大した。また、学生の活動も単発的なものから継続的、重層的なものへと深められるとともに、地域社会の大人の人たちとの触れ合いも広がってきた。このような利点は大学キャンパスで学生が中心になって実施してきた「信大YOU遊サタデー」にはないもので、学生の実践的指導力を養成する観点からも大変望ましいことであった。

しかし、このような改革にも危機管理という観点から新たな問題点が浮かび上がってきた。子どもたちを地域社会から大学キャンパスに集める「サタデー方式」ではなく、地域のプラザで地域の子どもと触れあおうと意図したのであるが、上述のプラザは全て大学側から募集

した子どもたちの集まりとなり、地域社会の団体との連携を構築することができなかった。その結果8つのプラザの活動が土曜日に競合することが多く、学生スタッフの分配が難しくなり、担当の指導教員も一人でいくつものプラザを掛け持ちして無事安全の遂行にあたらなければならないようになった。このような運営の仕方では「信大 YOU 遊広場」を継続していくことは、危機管理上無理であると判断し、2年間で終了することになった。

「信大 YOU 遊サタデー」が7年間で終わり、「信大 YOU 遊広場」が2年間で終わっても、学生達の子どもとの触れあい体験を求める意気込みが衰えることはなかった。そこで地域社会の教育は本来地域に根付いてこそ本物であるという考え方にたち、学生は智慧と汗を流すが、地域の子どもの安全は地域で担って頂けるといふ団体と連携していく道を選んだ。そして、地域社会の中で活動することを強調するために名称を「信大 YOU 遊世間（ワールド）」と改称し、次の4つの条件を満たす団体を新聞報道を通して募集した。

- ① 子どもの育成や世代間交流などのふれ合い体験ができること。
- ② 学生も企画段階から参画できること。
- ③ 1年間単位での継続的な自然体験や社会体験ができること。
- ④ 子どもの安全等の責任は、その地域団体において受け持っていること。

これらの条件を規準として、地域の団体側と「信大 YOU 遊世間」側が協議し、合意が得られたところから活動を開始することになった。

4. 「信大 YOU 遊世間」の活動目標の変遷

2003年（平成15年度）から始まった「信大 YOU 遊世間（ワールド）」は、それまでの10年間に問題となったことや課題を、学生達が何度も何度も討議し合って改善を図ってきた結果誕生したものであ

た。学生達が主体的に取り組み、1年ごとに先輩から後輩へと受け継がれたからこそ十年目を迎えることができたのであった。

2003年度（平成15年度）と2004年度（平成16年度）の活動目標は、次の3点であった。

- ① 信州大学の学生・教員が、地域社会の教育活動に参画することを通して、大学と地域社会の連携・融合を推進する。（学問、連携、融合）
- ② 自然体験・社会体験における企画・運営・振り返りを通して、学生が自ら考え、自ら判断し、自ら行動する実践力を身につける。（実践力）
- ③ 学生が地域社会での教育活動を通して経験幅を拡大し、人間的力量の骨格を鍛える。（人間力）

2005年度（平成17年度）の目標は、学生達の協議によって次のように改められた。

『わ』 — 「ふれあい」（友情）・「つながり」（連携）・「たすけあい」（共生） —

この『わ』を具現化するために、次の3項目が1年間の具体的な目標として設定された。

- ① 「土づくり」と「人づくり」の『わ』による環境マインドの育成
- ② 「人」と「人」の『わ』による社会力の向上
- ③ 「心」と「身体」の『わ』による実践力（臨床の知）の陶冶

2006年度（平成18年度）は新しく「大樹—土は地域、樹は学生、枝は子ども、実は学び—」が目標として掲げられた。そして、2007年度（平成19年度）は、「共鳴—共に感じ、共に学ぶ、響き合いの輪—」が目標として掲げられ、10のプラザが地域社会の中で活動している。

これらの目標の底流に流れている学生たちの強い願いは、学生同士

が連携して地域社会の青少年育成活動に貢献することによって、自らの人間力を高めたい、人間としての幅と深まりをめざしたい、そして、将来の教師としての実践的指導力の基礎を身につけたいという熱意であると考えられる。学生達は多大な労を惜しまずに教材作りに共に励むことによって、企画力、社会力、コミュニケーション能力などの教師に求められる実践的指導力の基礎を養成していると考えられる。

次に地域での活動を通した学生の学びと地域の人々からの評価について、4つの具体的事例を通して考察することにしたい。

5. 「信大茂菅ふるさと農場」における具体的事例

5.1. 地域との連携体制

2000年（平成7年）3月に始まり今年度で8年目を迎えている「信大茂菅ふるさと農場」は、「信大 YOU 遊世間」のなかで最も長く継続されているプラザである。「信大 YOU 遊サタデー」が6年目を迎えた1999年（平成8年）に、岩手県盛岡市でNHK 主催のシンポジウム「土から学ぶ子どもたちの未来」が開かれた。筆者は「信大 YOU 遊サタデー」が乗り越えなければならないイベント的性格をどのようにして成し遂げるかを考え続けていた。そこに一筋の光明をもたらしてくれたのがシンポジストであったシンガーソングライターのイルカさんが紹介してくれた宮沢賢治の「稲作挿話」であった。それは次のような一節である。

これからの本統の勉強はねえ
テニスをしながら商売の先生から
義理で教はることでないんだ
きみのようにさ
吹雪やわづかの仕事のひまで
泣きながら

からだに刻んで行く勉強が
まもなくぐんぐん強い芽を噴いて
どこまでのびるかわからない
それがこれからのあたらしい学問のはじまりなんだ

筆者はこの一節にふれ、「信大 YOU 遊サタデー」が地域と連携した継続性のある取り組みに脱皮していく道は、荒廃地と化している休耕田を開墾することから始めることであると深く決意した。「人づくり」を「土づくり」から始めたいという思いを学部長に相談し、その了解をえてJA ながのの組合長さんにお目にかかり、長野市茂菅地区に水田3アールと畑3アールを借り受けることが実現した。

営農指導にあたって下さっているのはJA ながの営農指導課の北沢課長さんと地元茂菅地区の農家林部信造さんである。農場長は自主的に立候補した学生がつとめ、林部さん、北沢課長さんの3者が綿密に連携を取りながら、子どもたちとの農作業体験を継続してきている。地域の子ども(20名~40名)が参加する活動は年間8回実施されている。

5.2. 学生の地域社会における学び

大学のキャンパスの中では学べない様々なことを学生は地域社会での活動を通して学んでいる。平成17年度に農場長をつとめた学生は次のように述べている。

「私に農場長が務まるかなあ」というのが最初の正直な私の気持ちだった。それは、農場長は緑の下の力持ちとして崩れるわけにはいかないと思ったからだ。しかし、そんな思いはすぐに消えてしまった。それは一緒に活動を作り上げて下さる林部さんが緑の下の力持ちとなって支えてくださったからである。初めての活動では、林部さんが「信大茂菅ふるさと農場」という看板がないことを知ってすぐに用意

して下さった。また、学生スタッフは、活動日が近づくと積極的に準備を夜遅くまで手伝ってくれたり、声をかけてくれたりした。こんなすばらしい人たちや仲間たちに囲まれて農場長をやれたことを幸せに思う。

活動中は、どうしたら子ども同士の関わりを深められるかを考え込んだこともあった。しかし、それは、自然が難なく解決してくれた。カエルやバッタ、トンボが子ども同士をつなげてくれたのだ。まさに自然と人がつながった瞬間だった。そして、知らない人が土に触れることで知らず知らずのうちに会話が生まれ、笑顔になる。汗が流れているのも忘れて黙々と作業をする姿。嫌いだったはずのものを笑顔でほおぼる姿。これらはすべて自然と人、そして人と人のつながりから生まれたものだと思う。普段の生活ではなかなか関わる機会の少ない子どもと学生、保護者、地域の方々、そしてJAの方々が一つの輪になったのも、自然が真ん中に入ってくれたからだと思う。そんな人々や自然に感謝したい。

そして、作物を育てることの大変さを自分の体で実感することができた。」¹⁾

5.3. 学生の青少年育成活動に対する地域社会からの評価

地元の農家先生であり学生達が「長野のお父さん、お母さん」と言っていて尊敬し、慕っている林部信造さんは学生たちの活動に対して、次のような評価をして下さっている。

『信大茂菅ふるさと農場』を開設して7年、この間に携わった大勢の学生の皆さんが社会人として、県内外で活躍されています。今年もこの実践農場で体験を重ねた学生の皆さんが、大きな夢と希望を持ち、先輩たちの後に続きます。私も定年後、土井先生とこの「ふるさと農場」で出会って以来7年、この農場から毎年、いろいろな事を体験さ

せていただき、今なおこの出会いの素晴らしさを実感しています。

人は出会いにより変わると言われます。良い出会いを大切にすることにより人は大きく育つと言われます。これまでにこの「ふるさと農場」で出会った人たちは皆、心の豊かさと明るさを持ち備えています。物事を明るく積極的に捉え固定観念にとらわれず、幅広い知識と探求心が旺盛であり、労を惜しまず、自ら実体験を求め、汗を流す人たちであり夢があります。農場はあくまでも学生の皆さんの自主的な力で企画、立案、実践し、責任を持って運営し、出会いのすばらしさと感動を味わわせてくれます。専攻教科を越え、先輩、後輩との出会い、苦楽を共に味わう農場での仲間、個性豊かな子どもたちとの出会い、子どもの成長を願う父母の皆さんとの交流、自然界に生息する生物、植物とのふれあい、農作物を育てる楽しみ、収穫の喜びと感動。そして、国際協力田として飢餓に苦しむマリ共和国への援助米。食の大切さを知る等、幅広い活動の場を提供してくれます。

このように、「茂菅ふるさと農場」は、人と自然との出会いを教え、教育学部ならではの農場として今日まで発展してまいりました。ここでの出会いは必ずや自分の糧となります。私も農場での出会いを大切に、来年度も若い皆さんのエネルギーをいただきながらがんばっていききたいと思います。」²⁾

6. 「青木村えがおクラブ」における具体的事例

6.1. 地域との連携体制

青木村教育委員会と連携した「青木村えがおクラブ」の活動は3年目を迎えている。筆者は青木村の小岩井彰教育長と出会う機会があり、学生の成長のためと村の活性化のためという双方の求める理念が一致したのが契機となって「青木村えがおクラブ」が始まった。教育学部から青木村までは車で1時間以上かかるので移動が大変であるが、青

木村は学生の活動を快く受け入れ、村の宿泊施設や温泉を使わせていただき、泊まり込みで活動することができる。また青木村では信州大学教育学部の「青木村えがおクラブ」だけでなく、信州大学工学部、長野大学、上田女子短期大学の学生も受け入れて村の活性化のための活動を幅広く展開している。そして、これらの団体を一つに組織して「和耕人」(わこうど)と命名し、相互の連携・協力関係を築いている。

「信大 YOU 遊世間」の各プラザでは子どもたちとの関わりが中心であるが、「青木村えがおクラブ」では子どもたちだけでなく、お年寄りの方や壮年の方など地域の様々な人々と一緒に活動している。「青木っ子合宿」と呼ばれる1週間にわたる通学合宿や村内ホームステイなど年間10回にわたる行事が実施されている。

6.2. 学生の地域社会における学び

青木村での学生たちの学びはとても深い。これは取りも直さず小岩井教育長のご指導によるものであるが、次にいくつか紹介したい。

「一時期は人間関係や生活の余裕がなくなったことで本当に悩んで、もう青木から縁を切って逃げたいとまで思いましたが、それを乗り越えて得たものは本当に大きいと感じています。青木にかかわる中では、自分の未熟さを思い知る機会が非常に多いですが、その分、成長できるきっかけになります。私は両親が信州に来たときには是非、青木村に連れて行きたいと思います。」

「今年一年を通して、青木村で人と人のつながりというものを学んだと思います。活動の中で具体的に動いてみることの大切さを教えてもらったと思います。」

「青木村で活動してきて苦しいこともあった。本気で怒られ、正直青木村に関わることをやめたいと思うことさえあった。しかし、今考えると怒られたことは本気でぶつかってきてくれている証拠で、自分

の糧になったと感じる。」

「社会に出ることに臆病でしたが、青木村での多くの人と出会い、共に活動することで、とても楽しみになりました。」³⁾

6.3. 学生の青少年育成活動に対する地域社会からの評価

小岩井彰教育長は次のような評価を寄せてくださった。「延べ200名を越す若者が青木村で活動してくれました。感謝します。様々な姿がありました。真剣なまなざしで授業参観しているもの、不登校の生徒の家で夕飯や風呂までいただき自分の存在意味を考えて涙するもの、中学校の教員と議論し、自分の思慮の浅さに悔し涙をながすもの、通学合宿で疲れ果てながら願いに向かって力をふりしぼるもの、83歳のおばあさんに取材を始めたところ、訪ねるたびにおばあさんが化粧をし、おしゃれをして待っていてくれることの喜びと驚きを語ってくれるもの、地域の祭りに参加し真っ赤になりながら古老と語り合っているもの等々。そんな皆さんの姿から若さと熱を感じてきました。

腹の底からいっしょに笑ったこともありました。共に悩んだこともありました。怒鳴ってしかったこともありました。諭したこともありました。酒を酌み交わしたこともありました。ずいぶん乱暴だったと反省もしています。しかし、願いを具現する方向を共に汗をかきながら現場で具体的に確認してきたつもりです。「一人の子どもの後にある多くの願い」「ご縁とおかげさま」「地域に生きる」「酌の仕方」「おとりもちの心」等の世の中の当たり前の人間関係について具体的な行動を通して伝えたいと考えてきました。

皆さんの真摯な活動が子どもたちはもちろん、地域の大人たちの心もとらえ始めています。学校が活性化してきていますし、今度はいつ学生が来るのか待っているお年寄りや皆さんと酒が飲めることをこよなく愛している村の親父たちも出現しました。皆さんのおかげで確実

に村が動き始めていると感じています。最後は人だと思えます。本音で語り、共に汗して行動することが互いの社会力を高める源だと思えます。

皆さんの感想文に接し、身が引き締まる思いがしました。心から感謝すると共におかげさまの気持ちでいっぱいになりました。皆さんの熱い思いと真摯な姿勢を村全体で大切に、学びの場を深め、広げていけたらと思っています。皆さんとのご縁に心より感謝いたします。共に進みましょう⁴⁾

7. 「麻績村 de 遊ぼう」における具体的事例

7.1. 地域との連携体制

麻績村での YOU 遊世間の始まりは平成17年2月のことで今年で3年目になる。筆者は男子学生2人とともに麻績村の小学校で開かれた地域の高齢者による60年ぶりの「たたき独楽作り」というイベントに参加した。この席で市川祥介教育長さんと対話し、「おみ図書館」と「信大 YOU 遊世間」が連携して青少年の育成事業に参画させていただくことになった。

「おみ図書館」は平成15・16年度に小学校校舎の大規模改造が行われたときに、小学校図書館と公民館図書館とを兼ね備えたものとして建設され、児童館的役割も期待してスタートした。この「おみ図書館」を舞台として学生達は図書館運営委員会にも参加させていただき「麻績村 de 遊ぼう」のプラザが発足した。そして1年間に「バスデーカードを贈ろう」「おにおにシリーズ」「空へ飛ばそう僕の夢」「麻績村オリンピック」を開催し、子どもたちの喜びを広げた。

7.2. 学生の地域社会における学び

麻績村での「信大 YOU 遊世間」を切り開いた学生は、「たたき独

楽」作りを一緒に楽しんだ子どもとの触れ合いの感動を次のように述べている。

「子どもたちは、初めて会う僕らに緊張していましたが、少しずつ打ち解けていきました。とても素直で元気のいい子どもたちだなあと思いました。もう一度この子たちに会いたいなあと思いました。すると、ある子どもが「かずにい、また来てくれるよね？絶対また来てね」といいました。僕はすぐに「うん」と答えました。あときは本当にうれしかったです。僕たちに「絶対また来てね」と言ってくれる子どもたちの思いに応えたくて、僕は「麻績村 de 遊ぼう」と名付けたプラザをやりたいと思いました。僕にとってこの子たちの言葉がこのプラザをやる何よりの原動力であり、やる気につながりました。」⁵⁾

7.3. 学生の青少年育成活動に対する地域社会からの評価

前麻績村教育委員会教育長の市川祥介先生は学生の活動に対して次のような評価を寄せて下さった。

「信大 YOU 遊世間」の代表者が図書館運営委員の一員となり、図書館行事のサポートのみならず、「信大 YOU 遊世間」主催の活動を企画推進してもらった。それは、友だちや異学年とふれあえる遊び、高学年や男子向けの遊びを主なねらいとした「遊びの教室」の開催であった。

具体的には「飛び出すカードを作ろう」（6月）、「いろいろな鬼ごっこをしよう」（6月）、「空飛ぶ物を作ろう」（9月）、「麻績村オリンピックをしよう」（11月）である。どの活動も入念な事前の準備や子ども達への適切な対応もあって大好評であった。例えば、「麻績村オリンピックをしよう」の紙ホッケー競技では、活動的な高学年の男子も汗を流しながら懸命に取り組み、休憩時間中も紙スティックを補修するなど夢中になる姿がみられた。

このように YOU 遊世間の若い学生諸君たちの活動は、「おみ図書館」の活動の幅を一層広げてくれただけでなく、若い世代との交流経験の少ない子どもたちや高齢者たちにも新たなエネルギーを与えてくれ、地域の活性化に大いに貢献してくれることに繋がったことは感謝にたえない。また、彼ら自身も人生経験豊かな高齢者や、子どもたちから学ぶことも多かったに違いない。それらが、これから教師として教壇に立つとき、必ず役立つであろうことを確信し、今後の活躍に対し大いに期待しているところである。」⁶⁾

8. 「信州すざか農業小学校」における具体的事例

8.1. 地域との連携体制

須坂市では平成17年度に市長の提案によって「信州すざか農業小学校」を開校し、市内の全小学校から55人の児童を募集して年間20回の農作業体験学習を開始した。農家先生が直接児童の指導にあたるのであるが、さすがに農業の専門家ではあっても、1年～6年の小学生を扱うことには苦勞されている様子であった。そこで農家先生と子どもたちの間に学生が入れば、学生は両者をつなぐ役割を果たすとともに、農作業の体験学習の在り方についても実際に学べるに違いないと考えた。このような考え方を須坂市教育委員会生涯学習課にお伝えしたところ、快諾を得ることができ2年目を迎えている。

「信州すざか農業小学校豊丘校開設要領」は次のような目標を掲げている。

- ① 子どもたちの健やかな成長に欠かせない自然体験活動が不足している現状を考慮し、子どもたちがたくましい精神力、想像力を身につけることを願い、総合的・自主的な体験活動の場として、年間を通した農業小学校を開校する。
- ② 子どもたちが、異年齢の子どもや保護者、地域の大人（主に高

齢者)と触れあうことにより、相互の仲間作りや地域連帯感を養うとともに、地域の文化に触れることにより、ふるさと須坂の良さを再発見する手助けをする。

8.2. 学生の地域社会における学び

すざか農業小学校の活動に参加した学生は、多くの人との出会いを通して、三つのことを学んだと述べている。「はじめにスタッフの仲間から学んだことは、子どもたちへの関わり方は一緒に作業することだけではないということです。作業する子どもの隣に何も言わず寄り添ってあげることも一つの支援であること、異年齢の子どもたちが遊ぶときは、前に出て子どもたちを引っ張らなくても子どもたち同士でルールを決めることができるので、見守ることも大切だということでした。次に保護者の方や農家先生から学んだ事は、子どもにとって危険だと思われることを子どもがしていたら叱るということを学びました。このことを学ぶ前の私は、子どもと関わる時叱ることができませんでした。子どもに嫌われるということを恐れていたからだと思います。これから子どもと関わる時にはこの点に注意して関わりたいです。最後に子どもたちからは、多くのことを学びました。子どもは遊びの天才だということを実感しました。自然の物を何でも遊び道具に変えたり、大人が入らなくても自分たちでルールを決め楽しく遊ぶことができ素晴らしいと思いました。また、子どもは本当に純粹で素直であることも実感しました。ある活動の中で友人が転んで泣いているときに心配して声をかける子どもの姿を見ることができました。

この活動に参加して教師となって現場に出た際に役立つことをたくさん学びました。大学での講義では学ぶことができない実践力が身に付いたと思います。』⁷⁾

8.3. 学生の青少年育成活動に対する地域社会からの評価

信州すざか農業小学校豊丘小学校の農家先生であり、校長先生でもある羽生田郁雄氏は次のような評価をしてくださった。

「農業小学校の今後の運営と課題につきましては、子どもたちの成長支援の場として、これからも息の長い事業になるよう、私なりに精一杯協力をしていきたいと思います。我々農家先生として指導する立場の人間と致しまして、授業以外の日も、農地や作物の管理をしたり、授業に備えて用意をしたりと、全てが初めての取り組みであり試行錯誤の連続で、正直言ってかなりの負担となってしまったことも、これからの課題として見えてきました。「継続は力なり」平成18年度のこの農業小学校の活動は、須坂から、また新しい力を発信することができました。

最後になりましたが、子どもは家庭・地域の宝であり、国や人類の宝です。子どもは遊びの中で育つことから、楽しく豊かな経験をできるだけ多くさせてあげたいと思います。この1年間ご支援ご協力をいただいた農家先生、応援して下さいました保護者の皆様に感謝し、土井先生をはじめとする信州大学教育学部の学生スタッフの皆様には、農家先生の目の届かない部分で、お兄さんお姉さんとなり、子どもたちをまとめていただきました。皆様方の今後の活動に期待し、御礼申し上げます。誠にありがとうございました。」⁸⁾

9. おわりに 教員養成への貢献

信州大学は、2004年度（平成16年度）に独立法人化し、地域貢献を果たしていくことが益々重要になってきている。1994年度（平成6年度）に「信大 YOU 遊サタデー」が発足した頃には、まさかその十年後に信州大学が法人化するなどということは、思いもよらないことであった。これからの十年においても、法人化の進展とともに急激な変

化が待ち受けているに違いない。「信大 YOU 遊世間」の運営においても、ブランドとして生きていくためには、厳しい質と誠実な実践が求められるにちがいない。教育者として真剣に自己改革に取り組み、学生の成長と地域貢献に尽くしていきたいと願っている。

「信大 YOU 遊世間」の今後の課題は、一人ひとりの学生を大事にして、先輩から後輩への流れの中で学生が育つように配慮することである。先輩と後輩が共に語り合い、共に行動し、共に活動を振り返って、切磋琢磨していくことである。そして、この学生の輪の中に筆者も入って学生の声をよく聞いて、自ら成長していくことである。

教員養成学部の使命は、「教育者としての使命感」「幼児・児童・生徒に対する教育的愛情」「人間の成長・発達についての深い理解」そして、「教科等に関する専門的知識や広く豊かな教養」を身につけた学生を教育界に送り出すことにある。

「信大 YOU 遊世間」の活動を通して学生たちは、「幼児・児童・生徒に対する教育的愛情」を深めることや「教育者としての使命感」を深めることにおいて有意義な成果を修めている。また、学生同士の友情を深めるなかで、企画力、創造力、コミュニケーション力などの実践的指導力の基礎を修練している。「信大 YOU 遊世間」という信州大学の地域貢献活動が、脱皮を重ねながら14年間も継続されてきたのは、一重に「いい先生になりたい！」と願う学生たちがいるからである。この活動が20周年を迎えられるように、筆者も学生とともに地域に出て汗を流したいと決意している。

【注】

- 1) 松井泉樹「世代を超えた人と人をつなぐ自然の力」『「信大 YOU 遊世間」の教師教育学研究（第12集）—地域貢献の体験に観る「臨床の知」の省察—』信州大学教育学部2006年3月 24頁
- 2) 林部信造「『信大茂菅ふるさと農場』での出会い」『「信大 YOU 遊世間」の教師教育学研究（第13集）—地域貢献の体験に観る「臨床の知」の省察—』信州

大学教育学部2007年3月 47頁

- 3) 末松辰規ほか「共に学びの場を広げよう」『「信大 YOU 遊世間」の教師教育学研究（第12集）—地域貢献の体験に観る「臨床の知」の省察—』信州大学教育学部2006年3月 79～84頁
- 4) 小岩井彰「共に学びの場を広げよう」同上 13頁
- 5) 大塚一哉 同上 85頁
- 6) 市川祥介「YOU 遊世間の皆さんの「おみ図書館」での活躍」同上 12頁
- 7) 細田有希「教師となった際に役立つことを学べた」『「信大 YOU 遊世間」の教師教育学研究（第13集）—地域貢献の体験に観る「臨床の知」の省察—』信州大学教育学部2007年3月 80頁
- 8) 羽生田郁雄「御礼、今年で2年目終了しました」同上 84頁

(受稿日 2007.9.19 掲載決定日 2007.10.9)

(どい・すすむ／信州大学教育学部)

Evaluating the Contribution made over 14year projects by Shinshu University Students to the Local Community

Susumu Doi

【Abstract】

In this paper, We first clarify the evolution in the organization and the purpose of the “Shindai You—yu world project” over the last fourteen years.

Secondly We describe how this research has been planned and executed in cooperation with the local community.

Thirds, We provide what the students gained through their activities in the local community, and also clarify how the local community has evaluated the students' activities.

The follwing projects were :

1. Shinshu University Mosuge Farm
2. A smiling Club in Aoki village
3. A “Let's play and Learn” Project in Omi village
4. Shinshu Aguricaultural Elementary School in Suzaka city

The result suggests that the students have gained valuable and helpful insights through projects to them,which they could not have ac-

quired through campus education, and moreover, these social activities have been highly evaluated by the community participants.

Keywords and phrases Shindai You—yu world project, contribution to the local community, Shinshu University Mosuge Farm